

笑って、踊って、みんな繋ぐ！

伝統芸能の継承というとなんだけか堅苦しくて難しそうだけど、ここではみんな、なんだけか楽しそう。大人も子ども一緒に練習失敗しては笑いあう。



「鹿島踊り」はもともと常陸国(茨城県)鹿島神宮の鹿島信仰から伝わったと考えられているそうだ。「小田原市郷土文化館研究報告」の「根府川の民俗芸能「鹿島踊り」と「福おどり」について」(浜田和政・著)の中で「その常陸国の鹿島神は航海神であるという信仰とは別に、東国にあって絶えず神託する予言性も重んじられていた神であった。その鹿島神の神託に基づいて下級神人が正月の年頭から諸国に触れ回った「事触れ」の鹿島信仰がある。それは広範囲にわたり広まり信仰のされたもので、その姿は白衣に烏帽子、襟に幣束をさすという独特の格好をしたものであった。」とあり、その衣装が今日でも根府川の鹿島踊りに名残を見せていることに小さく感動する。また、寺山神社の祭神も常陸国の鹿島神社と同じ武甕槌命(たけみかづちのみこと)だ。



7月の蒸し暑い夜。相模湾を一望できる、絶好のロケーションに立つ『根府川公民館』には小さな子どもたちから、その親、また、その親の世代に、さらにその上の長老クラスまで、約100人ほどが集まっていた。

ここは、小田原市の中でも湯河原より位置する相模湾に面した傾斜地にある根府川町である。この一帯は片浦地区とも呼ばれ、柑橘類の栽培が有名なところだ。海岸線ギリギリまで迫る山の斜面で栽培されているみかん畑やレモン畑から太平洋を眺める景色は絶景で、まさに海と空と山の三拍子揃った風光明媚な土地でもある。

そんな根府川の人々が代々受け継いでいる有名な伝統芸能がある。「鹿島踊り」という神事舞踏で、「神奈川県無形民俗文化財」に指定されている。根府川は石材の産地で、石船(石材運搬船)に関する仕事をする人々が多かったため、海や船、航海に関わりのある「鹿島信仰」が定着し、「鹿島踊り」も伝えられるように

なった。古くより7月の15日に根府川の鎮守である寺山神社の例大祭で、航海安全、悪疫退散、豊漁祈願として、奉納されていたが、昭和40年代に入ってから毎年7月の第3日曜日に変更され、以来続いている。

踊りの衣装は、本来白張浄衣・烏帽子に幣束(畳んだ神などを木に挟んだお祓いなどに使う道具)と、扇を持つ形だが、最近では揃いの浴衣も多い。

現在、この根府川の鹿島踊りは根府川自治会の「根府川寺山神社鹿島踊保存会」のみなさんが保存と継承の活動を行っている。昔の踊り手は若衆組という家業を継ぐ一家の長男である青年たちに限られていたが、時代の変遷に合わせてるように青年団の男子と少し対象が広がり、昭和50年代に入ると小学校4年生以上の男の子も加わり、さらに昭和60年代になると女の子も参加できるようになり、学年も小学校三年生以上となり、幅広い年齢層になっている。

練習は本番の一週間前から毎日夜の7時から公民館で行われる。6時半頃着くと、続々と人が集まってきて、子どもたちは海を望む最高のロケーションの公民館の駐車場で、絶景には目もくれず駆け回って遊んでいる。公民館の中では、子ども会のお母さんたちが慌ただしく、しかし手際よく机などを並べている。7時少し前に町内放送でこれから鹿

根府川・寺山神社
鹿島踊りの風景

